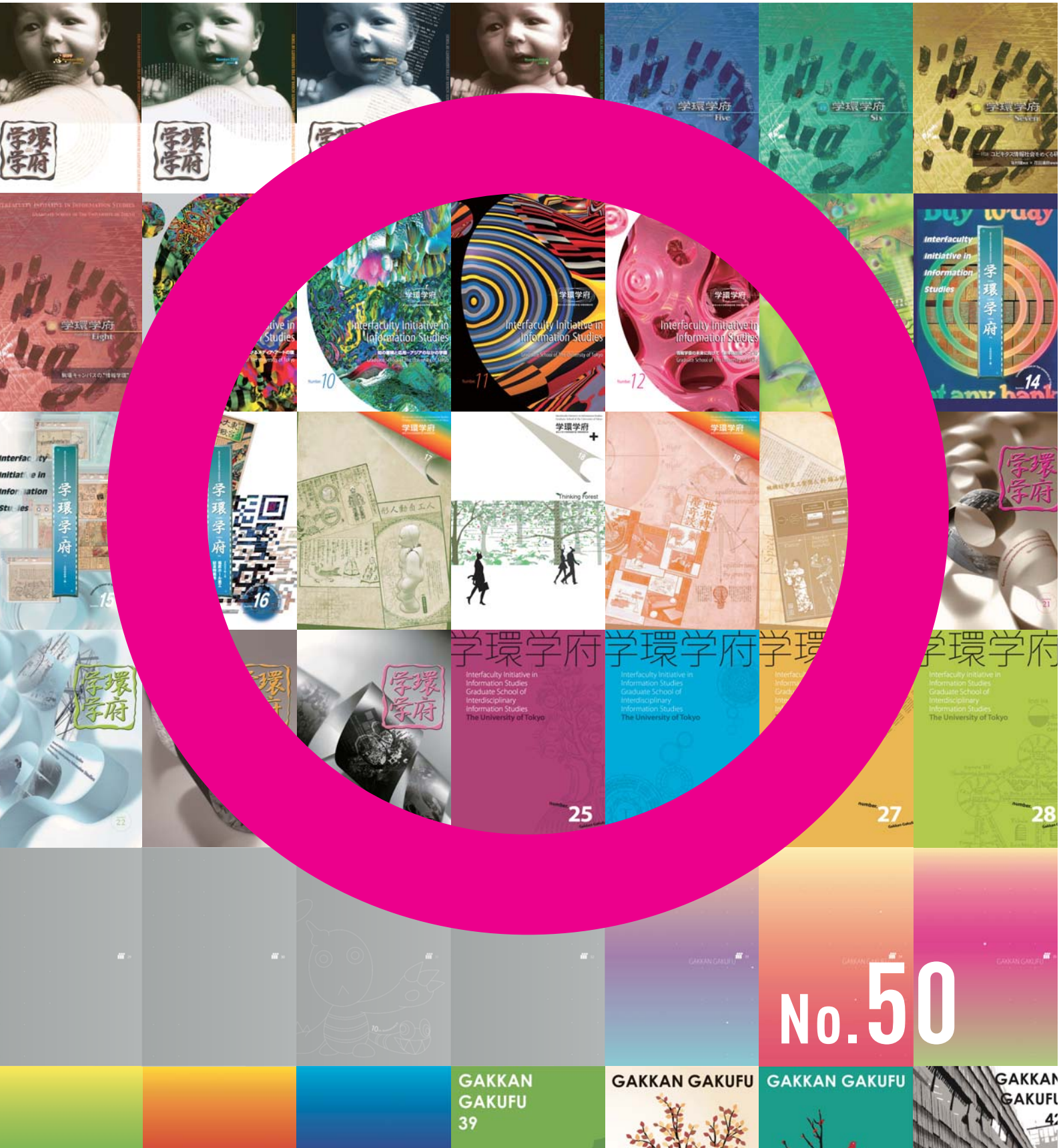
# GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



学環学府のニューズレターが、50号を迎えました。2002年の創刊から16年、その制作にはこれまで教職員と学生、総勢30名あまりが関わっています。また、外部の印刷所やデザイナーの力にも大きく助けられてきました。ニューズレターの歴史を探るため、創刊の指揮をとった原島博名誉教授（0〜8号）、もっとも長く編集委員をつとめた前波奈保子さん（15〜41号、元学環長秘書）と、林 香里教授（10〜36号）にお話を伺いました。歴代の表紙とともにふり返ります。

## 0-8

2002年冬〜2005年1月

ニューズレターは、アイデンティティになる。学環学府は、いつどこの部局の先生に流動教員としてきてもらうか分からない場所。外部の先生にも、普段から学環学府を身近に感じてもらおうと作り始めました。（原島）

この期間の発行元は、企画委員会の実行部隊だった「企画室」。当時学環学府は小さな部局だったので、委員会ばかり増やしてもいけないとの判断から、広報組織は作らず企画室が広報も兼ねることに。創刊準備号（0号）の発行は、学環学府の誕生から3年目の2002年冬。濱田純一初代学環長から引き継いだ2代目、原島博学環長のもとで創刊されました。

## 9-12

2005年4月〜2006年1月

東大本部に集まる各部局の広報誌をご覧になった、林先生の言葉が印象的でした。（前波）ズラーっと並んでいてね。よし、この中からまず一番に手にとってもらえるものを作ろう、と新人の私は思ったのよね。（林）

2004年、学環は社会情報研究所と組織統合。翌2005年の10号から、発行元が「編集委員」に変更されます。共有されていたのは、表紙のデザインは学環でしかできないものに！という思い。そこで、9号よりCGアーティストの河口洋一郎先生が登場、表紙を担当しました。ニューズレターの制作は、0〜38号まで印刷所（睦美マイクロ株式会社）とのやりとりを通して行なわれています。河口ワールドをいかに表現するか、色校の大変さは想像に難くありません。

## 13-16

2006年4月〜2007年2月

他の部局から、「その表紙はどうやって作っているんですか？」と問い合わせを頂いたこともありました。（前波）

2006年、福武ホールが着工。16号には、寄付者の福武總一郎氏と当時の吉見俊哉学環長の対談が掲載されています。表紙では、学環所蔵の資料を活かしたシリーズがスタート。第一次世界大戦期のプロパガンダポスターとかわら版、錦絵をCG加工しています。ポスターは、元々外務省情報部が収集し、新聞研究所が譲り受けたもの。かわら版と錦絵は、吉見学環長が携わっていた「小野秀雄コレクション」より。

## 17-20

2007年4月〜2008年1月

表紙のテーマは“Past + Future”。20号では、池内克史先生の研究室から舞踏するロボットが登場。小野秀雄コレクションのかわら版3枚と合成されています。18号には、建設中だった福武ホールの長く大きな工事壁を、映像やメディア・アートを活用して“知の森”へと変容させた、「かんがえる森」プロジェクトのイメージが用いられています。

## 21-24

2008年5月〜2009年2月

実は、深代千之先生（当時の企画広報委員長）が「次（の表紙）は、筋肉だ！」と言われて…イメージにするのが難しく、デザインを何度もやり直しました。（前波）

2008年3月、福武ホールが竣工。21号には、記念式典と建物内のようすがレポートされています。表紙のデザインは、環をイメージしたスパイラルのなかに、福武ホールをはじめとする写真や研究資料があしらわれています。また、23号よりニューズレターの編集委員に学生が加わり始めました。

## 25-26

2009年5月〜2010年2月

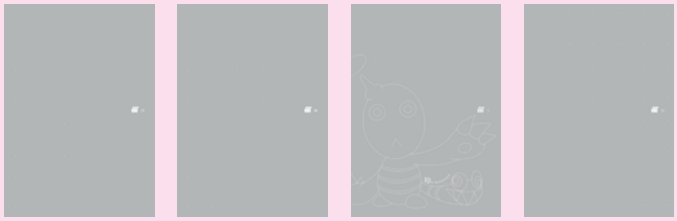
この頃、本館一階の廊下にマガジンラックが置かれるようになって。ニューズレターは手に取ってもらえてなんぼ、表紙の上部が目立つようにしました。（林）

2009年、学環は設立10年目。表紙のデザインは、この年の4月に着任した石田英敬学環長による「知恵の樹」プロジェクトから。“完全で普遍的なことば”の体系を追求する図や資料がモチーフに。また、25号からは「編集後記」がスタート。編集委員の人となりが垣間みられるようになりました。

# 29-32

2010年5月〜2011年2月

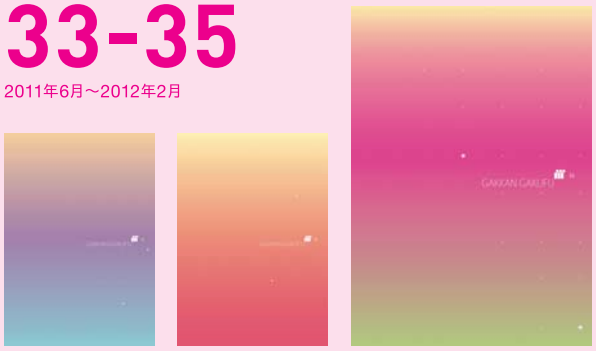
ミニマルな表紙ですが、中のページはカラフルなんです。
表よりも裏地が派手っていう、着物からの着想。(林)



福武ホールの「考える壁」をイメージした表紙。光沢ある落ちついたシルバーの色合いは、再び印刷所の腕の見せどころに。31号では、学環学府創立10周年記念シンポジウムを前に、特別企画アンケートを学生・教職員に実施。「未だに人に学環のことをうまく説明できない」の質問に、61%の人が「はい」と答えています。

# 33-35

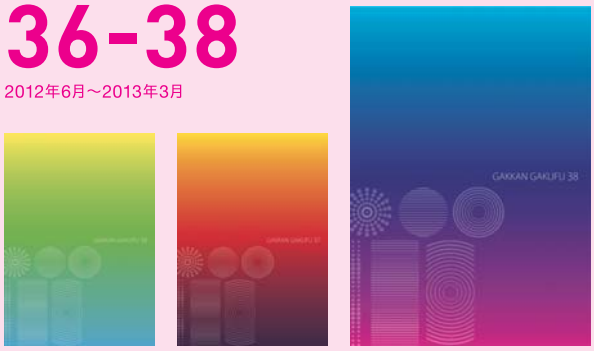
2011年6月〜2012年2月



2011年3月11日の東日本大震災をうけ、明るい色味の表紙にもどそうと編集委員で合意。「虹」をイメージした鮮やかなデザインとなりました。よーく見ると、色だけでなく小さなドットのデザインも各号で異なっています。ここでは見えません。

# 36-38

2012年6月〜2013年3月



2012年、ダイワユビキタス学術研究館が着工。学環学府の創設時、最初に作られた場所である暫定建物(プレハブ校舎)2棟の取り壊しが、惜しまれながら進みました。38号では、根津神社での安全祈願祭のようすもレポートされています。表紙の虹色はよりビビッドに。

# 39-41

2013年6月〜2014年2月

樹のモチーフの表紙シリーズ。ここからネット印刷を導入、中身のレイアウトを学府の学生(佐藤彩夏さん)が初めて担当しました。これ以降47号までは、表紙も含めて複数の学生がデザインの作業に加わっています。39号では、西垣通先生と姜尚中先生による珍しい「合同最終講義」の記事が、41号では、10周年を迎えた東京大学制作展の特集が組まれています。

# 42-44

2014年5月〜2015年2月

2014年4月、ダイワユビキタス学術研究館が完成。42号でそのダイワユビキタスを、43号で本館を、44号で福武ホールの写真を加工した建物シリーズの表紙。42号では、ダイワユビキタス学術研究館の記念式典と、館内のようすがレポートされています。

# 45-47

2015年5月〜2016年7月

2015年、学環学府のウェブサイトリニューアル計画が始動。それに合わせ、ニューズレター用に記事を編集するのではなく、ウェブサイトに掲載した記事をニューズレターにも転載する“ウェブファースト”の方針を、丹羽美之先生(当時の企画広報委員長)の発案により導入。同時に、両者を担当する編集部が設けられ、現在に至ります。

# 48-50

2017年3月〜2018年3月

48号よりデザインを一新(デザイナーは、MARUYAMA DESIGNの丸山智也さん)。48号ではシンプルな環をひとつ、毎号その環を中心にデザインを展開していくシリーズを始めています。現在の編集部では、学環学府ウェブサイトにおよそ1週間に1本、新たな記事を更新。その中から選りすぐりのものを短く編集し、ニューズレターにも掲載しています。

全てのニューズレターは、学環学府ウェブサイト(学環・学府とは>紀要・出版物)よりご覧頂けます。

Continue...

# 医療をめぐるデータサイエンスの専門家育成を目指して

## 松山 裕 教授

2018年度、生物統計の実務家を養成する「生物統計情報学コース」が新設されます。生物統計家の役割や臨床研究のデザイン、情報学環との結びつきなどについて伺いました。

――生物統計学について教えてください。

生物統計学というのは、そもそも農業や水産学も含めて、いわゆる生物を研究対象とする分野での統計学のことを指しています。そのなかで我々は医療を専門とします。アメリカでは、“Biostatistics”。イギリスでは“Medical statistics”と言って、この方が直接的で分かりやすいかもしれません。生物統計情報学コースでは、医療における応用統計学という意味で「生物統計学」を使っています。

――農業や水産業における生物統計学とは、どう違うのでしょうか？

違うというのは、やっぱり生きている人間を対象とするからなんですね。例えば、薬を飲んだ／飲まないという2つのグループがあって、それを比較して結果に差がでるかどうかを統計的に判断したい。でも、患者さんですから、飲んでくださいって言っても飲まない人もいるし、病院に来てくださいと言っても来ない人もいる。そうした時に、状態の悪い患者さんのほうが欠測データとなりがち、あるいは薬の服薬状況がよくないということが起きています。そのような現実の人間に対するデータから薬の効果を正しく評価するための統計解析方法はどのようなものがよいのか、できる限り質の高いデータを効率良く得るための研究デザインはどのようなものか、そういうことを考えたりしています。

あるいは、非常に難しい難病があって、その薬の効果があるかどうかというのは何をもって測れるのか。例えば、血圧が上がった下がったというのは分かりやすい数値になるじゃないですか。でも、難しい病気というのは、何をもって治ったのかが分からない時があるんです。なので、患者さん自身に状態を聞くわけですね。でも、それが本当にその病態をとらえているのかと言われると、また難しい話になる。そこが水産学とか農学とかと圧倒的に違うところです。

――それはだいぶ違いますね。人間を相手にするということは。

もうひとつあるのが、我々はサイエンスというのと倫理の両輪を持たなければいけない、ということです。人間に対しては何をやってもいいっていうものではないですから。

――医学部ではなく、情報学環にできた経緯を教えてください。

色々検討しましたが、医学部のなかにつくった場合、受験生からするとやっぱりお医者さんになるというイメージを持ちやすいだろうと。我々がやっていることは、基本的にはデータサイエンスです。なので、バックグラウンドは文系でも理系でもかまわない。数字が好きだとか、医療に興味があるとか、そして何よりコミュニケーション能力がある人。人と喋るのが好きとかね。そうすると、医学部よりも情報学環だったんですね。

――生物統計家のイメージを持っていない学生も多いので、まずはそれを伝えていかなくてはいけないですね。

そうですね。生物統計家というと広いので、理論家もいるわけです。でも今回の生物統計情報学コースに関しては、そういう方がメインではなくて、現場での実務家といいますが、生物統計家のなかでも実務を担当する人、実際にお医者さんと共同して研究を推進していく役目を担う人を対象としています。

――具体的には、どのようなことをするのですか？

例えば、新しい薬ができたので世の中で認めてくださいといっても、何のデータもなければ誰も認めてくれない。なので、患者さんに協力を得たもとで、ランダム化（無作為化）比較試験といいますが、介入研究を行います。どのように治療法をランダム化するかとか、そもそも何人患者さんを集めればいいかとか、それらのことを統計的に問題なく結論がいえるかどうかを予測して、事前に決めるわけです。そして、集めたデータをどう解析すればよいのかも考えます。

――情報学環でやってみたいこと、期待していることは？

このコースに関しては、いい学生が入ってくれて、病院や医療機関にしっかり就職してくれて、現場で3年間働けば一人前にはなれると思うので、5年間かけてそういう人を育てたいですね。

我々は医者じゃないので患者さんは診られませんが、いい薬だったら、いい治療だったら、早くそれを世の中に出してあげたい。それも間違いが少ないように。ほんとうは効かなかったとか、副作用がもの凄く強いものを出してしまうとか、そういうことがないように中立な立場でやっていく、というのが我々の仕事です。そういう学生を育てるというのが学環におけるやりたいことというか、使命ですね。

あと将来的にはですが、情報学環という大きな枠組みにいるんですから、もうちょっと大きな事に切り替えていく可能性はどんどん出てくると思っています。例えば、遺伝子データとか、カルテなどの大規模医療情報データというのは沢山あるんですが、どうやって解析すればいいか誰にも分からない。そういう人を育成していくとか。それは、広い意味でのデータサイエンティストということになります。

――趣味について教えてください。

ゴルフです。ゴルフって、スコアが少ない方が勝つという稀少なスポーツです。再現性と、いかにリスクを管理していくかが求められる。まじめにいうと、平均値を移動させて、どうSD（標準偏差）を小さくしていくか、というスポーツなんです（笑）。

企画：ニューズレター編集部・大庭幸治（准教授）
聞き手・文章構成：鳥海希世子（特任助教）
写真撮影：潘 夢斐（博士課程）

## 東京大学制作展2017 “WYSIWYG?”

2017年11月16〜20日、東京大学制作展2017「WYSIWYG?」を本郷キャンパス工学部2号館にて開催しました。東京大学制作展は学府の授業の一環で、コンセプト設定・展示物制作・運営を学生主体で行うメディアアートを中心とした展示会です。今回のテーマ、「WYSIWYG? – What You See Is What You Get?」は見えるものを頼りに、私たちが見落としているかもしれない物事の本質を見出すことを目的としました。「ミラーレス・ミラー」や「Into the Womb」などの作品は、SNSやニュースサイトでも大きな話題として取り上げられました。各作品の詳細はウェブサイト（http://iiiexhibition.com）からご覧ください。

（情報理工学系研究科修士課程：有年亮博）

## 栗で持続可能を目指す 山江村との共同研究

山江村との共同研究は、2015年夏にスタートしました。熊本県南部にある山江村の栗は、1977年の昭和天皇への献上や、近年ではJALの国際線ファーストクラスやJR九州ななつぼしのデザートに採用され、パリの見本市にも出展しています。栗を目玉とする山江村の地方創生に携わり、共同研究では「山江村地方創生情報化戦略」と「山江村将来ビジョン：学校給食と地域の地産地消から持続可能な農業の実現へ」の策定、「やまえ栗の現状」の3つの調査に取り組んできました。2016年1月には山江村地域づくり研究所が開所し、その運営・企画も担っています。研究所の主たる事業は、調査研究・人材育成・ICTの活用です。

（特任講師：並木志乃）

## 教育部自主合宿

2017年10月7〜9日、千葉県にて教育部自主合宿を行いました。研究生が班に分かれて研究発表をするもので、教育部自治会が毎年実施しています。今年度は、43名の研究生と丹羽美之先生が参加し、37名の研究生がデザイン、アニメ、報道など9班に分かれて、夏から進めてきた成果を発表しました。発表中には、slackというSNSを利用して感想の共有や議論が交わされました。

（教育部研究生・東京大学教育学部：中森千裕）

様々なバックグラウンドを持った人が集まる教育部にとって、この自主合宿は親交を深める大切な恒例行事となっています。今年も昼は研究発表で熱心に議論を交わし、夜はコンパで盛り上がりました。合宿係を中心に研究生のみんなが数ヶ月かけて準備してきただけあって、とてもいい合宿でした。

（准教授：丹羽美之）

## 国際シンポジウム 「民主主義・ポピュリズム・グローバリゼーション —アートから考える現代世界の地政学」

2017年9月3日、北田研究室AMSEA（社会を指向する芸術のためのアートマネジメント育成事業）／社会の芸術フォーラムによる国際シンポジウムが開催されました。登壇者は邱君（アートディレクター）、加藤翼（アーティスト）、竹田恵子（文化研究／東京大学）、陳海因（文化研究・社会学／東京大学大学院）、藤原帰一氏（国際政治学／東京大学）、総合司会は北田暁大（社会学／東京大学）がつとめました。本シンポジウムは世界各地で民主主義の危機が叫ばれている状況の中で、アーティストはどのように民主主義とポピュリズムを再定式化し、その再定式化にもとづきいかなる実践を試みているかを問いかけました。

（特任准教授：竹田恵子）

Break it Before it's Broken (2015) ©Tsubasa Kato (Courtesy of MUJIN-TO Production)

## 中尾彰宏先生が「ドコモ・モバイル・サイエンス賞」授賞

中尾彰宏先生が「ドコモ・モバイル・サイエンス賞」にて「先端技術部門 優秀賞」を授賞しました。2017年10月20日、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて授賞式が開催されました。SDN（Software Defined Networking）技術であるDeeply Programmable Networkを世界に先駆けて提唱、その実証プロジェクトを主導したことなど、複数の理由から本賞が送られました。

（特任助教：鳥海希世子）

## 河口洋一郎教授定年退職（2018年3月31日）

河口洋一郎先生は、2000年の設立当時から、情報学環・学際情報学府の研究教育を牽引されてきました。自己増殖する「グロース・モデル」、伝統芸能との融合「ジェモーション」による情感的な舞台空間のパフォーミング・アーツ、生命体から発想するロボティック立体造形などに取り組まれ、世界的CGアーティストとしてご活躍されてきました。在職中、ACM SIGGRAPH Distinguished Artist Award、芸術選奨文部科学大臣賞、紫綬褒章などを受章されました。永年に渡るご貢献に感謝申し上げます。

（教授：苗村 健）

# CONGRATULATIONS

### 平成29年度大学院学際情報学府秋季学位記授与式

2017年9月15日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の学位記授与式が行われました。まず、修了者修士課程8名、博士課程3名に佐倉学府長より学位が授与され、その後、学府長と中尾専攻長より祝辞が送られました。

### 平成29年度秋季入学式・ガイダンス

2017年9月20日、福武ホールラーニングシアターにて学際情報学府の入学式および入学ガイダンスが行われ、入学者のうち6カ国からの留学生を中心に修士課程15名、博士課程8名が出席しました。

（学務係：佐々木清和）

詳細は、学環学府ウェブサイトの記事「平成29年度大学院学際情報学府秋季学位記授与式」（2017年10月12日掲載）、および「平成29年度秋季入学式・ガイダンス」（2017年10月19日掲載）をご覧ください。

# PEOPLE

### 着任教員自己紹介

**松原妙華 助教**

専門は情報法です。主に、報道倫理や表現の自由について研究しています。報道による名誉毀損や人権侵害に問題意識があり、現在は内部告発報道を対象に、公益通報者保護法等の関連法制度を含め、取材源の秘匿や報道の自由、知る権利について考察しています。学環の一員としてお役に立てるよう努めてまいります。

### 人事異動

［定年退職］
3/31　河口洋一郎 教授
　　鷹野 澄 教授
　　金木 茂 副事務長
　　上田公一 図書係長

［配置換（転出）］
3/31　板倉聖哲 教授（東文研へ）
　　倉田博史 教授（教養へ）
　　金井 崇 准教授（総文へ）
　　露木 聡 准教授（農学へ）
　　村上健太郎 助教（医学系へ）

［任期満了］
3/31　河井大介 助教

［退職］
12/31　川上 玲 助教
3/31　関谷直也 特任准教授
3/31　湧田雄基　特任助教
3/31　小林裕士　学術支援職員

［登用］
教員　11/1　仲谷佳恵 特任助教（常勤へ）
　　12/1　大島谷雅美 特任研究員（常勤へ）

［産休］
事務職員　3/14　和田那津子 総務係

# BOOKS

## メディア不信—何が問われているのか

**林 香里 著**

発売日:2017年11月
出版元:岩波新書

いまなぜ「メディア不信」が話題になっているか、だれがその「不信」を語っているか、それがどのような帰結を生みつつあるのか。ドイツ、英国、米国、日本のさまざまな事例をとおして、多くの人がマスメディアを自分たちの問題として振り返るきっかけになればと願っています。

## オーグメンテッド・ヒューマン Augmented Human

**—AIと人体科学の融合による人機一体、究極のIFが創る未来**

**暦本純一 監修**

発売日:2018年1月　出版元:エヌ・ティー・エス

人が馬を乗りこなす状態の極致は「人馬一体」と呼ばれる。ヒューマンオーグメンテーションは「人機一体」。人間が技術により自然に拡張されていく。高度に学際的な研究領域であり、影響は社会全体の構造変革に及ぶ。本書はこのように多面的な波及効果が期待できるヒューマンオーグメンテーション学の最新状況を解説する。

## デザインの小骨話

**山中俊治 著**

発売日:2017年11月
出版元:日経BP社

Suica改札機の読取機をはじめ、自動車や時計、またロボットから義足まで様々なデザインを手がけてきた山中氏。デザインエンジニアとして、また研究者として、人とモノ、そして自然の仕組みを深く観察してきた。デザインの雑学からスケッチのコツ、フリーランスとしての心得まで、スケッチとともに綴る短編エッセイ集。

# TOPICS

## 「ヒューマンオーグメンテーション(人間拡張)学」(ソニー寄付講座)サマースクール開催報告

2017年9月21〜23日、ソニー寄付講座「ヒューマンオーグメンテーション(人間拡張)学」のサマースクールが開催されました。初日はソニー本社でキックオフが行われ、2日目から3日目にかけて、東京大学のダイワユビキタス学術研究館にてグループワークが行われました。

参加者は5つのグループに分かれ、まず初日の講義や見学を踏まえながら「どの感覚をどのようにして変換するのか」について活発に議論を行ないました。その後、3Dプリンター・レーザーカッター・EMS機器などを用いた実装を行いました。

最終日にはダイワハウス石橋信夫記念ホールにて、各班が実装した感覚変換のデモを含めた発表会が行われました。「他人の視線を触覚として感じることのできるシステム」、「人形に与えられた痛みが遠隔の人に伝わるシステム」、「鳥肌をEMSによって再現し、ぞわぞわ感を共有するシステム」などユニークなアイデアが披露されました。発表の後はデモの体験会が行なわれ、体験を交えた活発な議論が行われました。

(修士課程:木村直紀)

## 日韓台シンポジウム「Media in Globalized Asia」

2017年11月24〜25日、日韓台シンポジウム「Media in Globalized Asia」が福武ホールにて開催されました。東京大学(以下、東大)とソウル国立大学(以下、ソウル大)の間で20年以上に渡って開催されてきた本シンポジウムは、昨年から国立政治大学(以下、政治大)が加わり、三ヶ国による交流を展開しています。

24日の午前中には、まずオープニングスピーチとして佐倉統学環長がゲスト参加者を歓迎した後、三大学から代表の先生方が登壇しました。その後、メディア論とコミュニケーション研究の分野から、三大学それぞれの教員による研究発表がおこなわれました。

午後には、学生によるポスターセッション(東大9人、ソウル大8人、政治大4人)が実施されました。ニュースメディアと報道、ソーシャルメディアとネットワーク、ゲーム、映画とテレビ研究、世論、国際関係、女性史など、テーマは多彩でした。その後、学生たちはワークショップに参加しました。5つのグループに分かれ、それぞれ本郷周辺の商店に「最近よく売れている品物」と「東京大学の学生に対する印象」について取材をしました。

(修士課程:林 東佑、博士課程:林 意仁、特任専門員:デイビッド・ビューストー)

http://www.iii.u-tokyo.ac.jp

あとがき

学環学府ニューズレターの記念すべき50号、お楽しみいただけたでしょうか。表紙のデザインの変遷をみても、
それぞれの時代がよみがえってくる感があります。東京大学の新設組織だった学環・学府にも、歴史が培われてきています。
その一方で、生物統計情報学コースが新設されるなど、さらに未来へと新しい展開が続いています。
はたして、ニューズレター100号のころの学環学府、日本、そして世界は、どうなっているでしょうか？（暦本純一）

GAKKAN 50　3. 2018
東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1　mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp
編集委員：暦本純一、水越 伸、David Buist、岡田美保、Pan Mengfei、鳥海希世子
デザイン：MARUYAMA DESIGN 丸山智也